

東日本大震災 教育復興支援レポート 2016



公益社団法人
日本ユネスコ協会連盟

子どもたちの成長が、東北のいちばんの希望。

東日本大震災から6年が経過しました。

改めて大震災で犠牲となられた皆さまに深く哀悼の意を表しますとともに、いまなお不自由な生活をおくられている皆さまに心よりお見舞い申し上げます。

被災された地域では、地元の方々の懸命な取り組みのもとに復興が着々と進んでいますが、一方で、現在もなお先の見えない不安や生活の不便さを抱えながら暮らしておられる方々も多くいらっしゃいます。

とくに、育ち盛りのお子さんのいる世帯の中には、新しい環境での生活再建を図りながら、日々成長する子どもたちの教育費の捻出に苦労している親御さんも少なくありません。

そのような中、将来の夢や目標に向かって前向きに勉強や部活をがんばる子どもたちの姿は、親御さんにとって、また東北の皆さまにとって、大きな希望であることと存じます。

日本ユネスコ協会連盟は、未来を担う子どもたちの健やかな成長と豊かな学びが続くことを願い、復興とともに成長していく子どもたちを応援してまいりました。全国の皆さまからの継続的なご支援のおかげで、これまでの6年間に、約4000人の子どもたちが安心して学べるようになりました。ご協力いただいたすべての皆さまに深く感謝申し上げます。

当協会連盟では、これからも子どもたちが安心して学校生活をおくり、夢や希望に向かって前進できるよう、引き続き支援活動を行ってまいります。

皆さまからの変わらぬご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。



公益社団法人
日本ユネスコ協会連盟 会長

大橋 洋治

目次

- | | |
|--|-----------------------------|
| 01 私たちが6年間で取り組んだこと | 14 MUFG・ユネスコ協会 東日本大震災復興育英基金 |
| 02 ユネスコ協会就学支援奨学金 | 16 アクサ ユネスコ協会 減災教育プログラム |
| 03 奨学生のいま ～奨学生インタビュー～ | 18 子どもたちの学びを支える支援の輪 |
| 04 「避難所で憧れた看護師になりたい」山本咲良さん | 20 会計報告 |
| 05 「弓道のインターハイで、優勝を目指します」坂本真美さん | 21 ご協力方法 |
| 06 「いまが充実！放送委員会で夢に向かう」安藤由美さん | |
| 07 「勉強も部活も逃げずにがんばりたい」友坂悠里くん | |
| 08 「新しい町を見つめて未来を描く」川本聡子さん | |
| 09 「ずっと野球が好きだから、夢は甲子園」
中山美里さん・舞さん・翔くん | |
| 10 子どもたちから、ご家庭から、「ありがとう！」 | |
| 12 被災地のいま・教育現場の声 | |



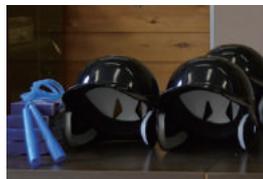
東日本大震災子ども支援募金 私たちが6年間で 取り組んだこと



学校への 緊急物資支援

2011年度完了

学校を再開するために、まず行ったのが緊急物資支援でした。被災により学習に必要な備品が流出してしまったため、144校・2教育委員会に対し、学校のニーズにあわせて、教材類や体育用品などの支援物資を届けました。また、仮設住宅や避難所と学校をつなぐスクールバスも支援しました。



文化・ 郷土芸能への支援

2011年度～
2013年度完了

震災によって危機に瀕した東北の祭り・文化を救ってほしい。被災地の声を受けて、失われつつある日本の自然・文化を未来へ伝える「未来遺産運動」の一環として、人びとの気持ちをつなぐ郷土芸能や祭りへの物資支援を実施しました。



心のケア支援

2011年度～
2015年度完了

地震と津波への恐怖から強い不安を抱いている子どもたちの、心理的ストレスをやわらげるために、夏休みにキャンプや絵画コンテストなどを実施しました。



社会教育・ コミュニティ支援

2011年度
～継続中

被災地では、仮設住宅で暮らすなど、生活環境が大きく変化しました。被災地のコミュニティ再生を目指して、コミュニティ図書館、学童保育所、移動図書館車、相撲場などを支援しました。



ユネスコ協会 就学支援奨学金

2011年度
～継続中

経済状況が悪化したご家庭の子どもたちが安心して学校に通えるように、返還不要の奨学金を3年間にわたって支援する活動を行っています。

≫ 2016年度の活動… P02-13



MUFG・ユネスコ協会 東日本大震災復興育英基金

2011年度
～継続中

両親もしくはいずれかの保護者が死亡・行方不明になってしまった子どもを対象とした、給付型の奨学金を支援しています。その他、学校花壇再生など、さまざまなプログラムを通じて、子どもたちの心豊かな成長を応援する支援を行っています。

≫ 2016年度の活動… P14-15



アクサ ユネスコ協会 減災教育プログラム



2014年度
～継続中

東日本大震災の経験や教訓を全国の学校防災につなげるために、学校への活動助成、教員研修会、実践報告会を実施しています。

≫ 2016年度の活動… P16-17





ユネスコ協会
就学支援奨学金

子どもたちの
学びを支える
ために

[概要]

対象者

津波による家屋の流失・損壊や原発事故の影響による避難などの理由で経済状況が著しく悪化した家庭の、高校進学を希望する中学3年生。

対象地域

岩手、宮城、福島で、被害の大きかった市町村を特定して実施。

支払金額と期限

奨学生一人当たり月額2万円を3年間給付。(中学3年次から高校2年次まで)
※返還不要の奨学金です。

[2016年度の支援]

2016年度は、2014年度、2015年度に採用した奨学生への継続給付を行うとともに、陸前高田市、石巻市、気仙沼市で新規採用を行いました。

受給者数

740名

2016年度
奨学金給付額

1億7850万円

支援地域

岩手県／大船渡市、陸前高田市
宮城県／石巻市、岩沼市、気仙沼市、多賀城市、亶理町
福島県／いわき市、大熊町、新地町、富岡町、浪江町、双葉町

[2011～2016年度までの累計受給者数] 2800名

奨学金は、当協会連盟から奨学生の各ご家庭に直接支援しています。

奨学金は、それぞれのご家庭で子どもたちの高校進学に必要な費用や高校生活のために、大切に役立てられています。

ユネスコ協会就学支援奨学金の活動はホームページにも掲載しています。

<http://unesco.or.jp/kodomo/>



Case 1



Case 2

奨学生のいま



Case 3



Case 4

interview



Case5



Case6



「就職したい病院に看護学校があるので、そこに入るのを目指しています」

震災があったとき、山本咲良さんは福島県双葉郡浪江町に住む小学4年生。直後に福島第一原子力発電所が爆発したため、自宅から避難した後、咲良さんの家族はなかなか落ち着くことができませんでした。町内を転々としてから葛尾村、郡山市、いわき市、そして栃木の避難所へ。咲良さんは、そこでようやく小学校に通うことになったのですが、入学3日目で猪苗代町に移動します。そこもわずか3ヵ月で、福島市内の仮設住宅に移りました。「慣れると移動、という繰り返しでした。栃木の小学校では、ランドセルをはじめ、学校側でいろいろと揃えてくれました。でも3日間しか通えなかった。友だちもすぐできたのに…。お別れのとき、私は浪江の住所しか知らなかったから、皆その場で手紙を書いて渡してくれました」

勉強も部活も、一步一步

福島市では、仮設住宅からやがて復興住宅へ。中学に引き続き、部活はバドミントン部です。「仮設から遠く、送迎バスの時間が決まっていた中学と違って、部活が終わっても自主練習できるから充実しています。部活の友だちとは、自転車でお花見に行ったり、いろんなところへ出かけるのがすごく楽しい」

勉強でがんばっているのは、数学や化学などの理系。将来は看護師を目指しているからです。「震災で避難所にいるとき、看護師さんがあちこち走り回って活躍していて、すごくかっこいいな、自分もああいうふうになりたいなと思ったんです」

一家の大黒柱である母の貴美子さんは、原発事故により職を失い、その後のストレスで体調を崩しました。復職もままならず、厳しい状況は続きますが、咲良さんを応援する気持ちは変わらないといいます。「いままで我慢ばかりだったので、本人のやりたいことをやらせてあげたいです。目標を持って、焦らず、一步一步進んでくればよい。それは、私も同じですね」

就学支援奨学金の受給が決まったときは、咲良さんのために、真っ先に電子辞書を買ってあげたとか。ほかにも制

避難所で 憧れた看護師 になりたい

山本咲良さん

福島県福島市 高校2年生

※奨学生やご家族の名前は仮名です。学年は取材当時のものです。

服から教科書、通学の電車賃、部活のユニフォームまで、奨学金は大いに活用されているそうです。

思い出はキラキラと輝いて

咲良さんは15歳のとき、震災以来、戻ることのなかった浪江町の家を見に行きました。しかし、緑豊かだった浪江は、木が伐り倒され、除染物を入れた黒い袋が積み重ねられ、色のない世界が衝撃的だったといいます。「放射線量が高く、家にあったぬいぐるみや教科書など、大事にしていたものは全部捨てるしかありませんでした。ただ、思い出のものはなくなっても、友だちと遊んでいた記憶はキラキラ輝いていて、いまでも鮮明に残っています」

貴美子さんの出身地は、浪江の南に位置する富岡町。いずれも原発事故によって住民が避難を余儀なくされた地域ですが、春は山菜採り、夏は鮎釣り、海も近くて、素晴らしいところだったといいます。

咲良さんも小さい頃から、浪江や富岡の豊かな自然の中でのびのび育ちました。その大切な思い出を胸に、目標が定まったいま、これから先の未来を見つめています。

「看護師を目指す前の夢は花屋さん。
お花が好きな母にプレゼントしたいと思っていました」



弓道のインターハイで、優勝を目指します

坂本真美さん

宮城県多賀城市 高校2年生

※奨学生やご家族の名前は仮名です。学年は取材当時のものです。



「弓道の大会前など緊張しているときには、大好きな GreeeeN の曲を聴いています」



りりしいはかま姿。弓道具やはかまは、使い慣れた中学のときのものを使っている。写真中央が真美さん

多賀城市の高校2年生、坂本真美さんは弓道女子です。高校は、弓道が強いという理由で選びました。弓道を始めたのは中学からだそうです。

「仲のいい先輩が中学で弓道部に入って、楽しそうな話を聞いていたので、自分も入ろうと思いました。それに、はかま姿がかっこよかったから(笑)」

高校では毎日、放課後に厳しい練習が続きます。土曜日にも練習、大会が近くなると日曜日や朝練もあるといいます。もちろん夏休みも毎日。なぜそんなにがんばるのか、弓道の魅力を聞いてみました。

「弓道はアーチェリーと違って、的に当たりさえすれば、的のどこに当ててもいいんです。それよりも、弓を引いている姿や型の美しさ、きちんとした態度が評価の対象になります。まさに武道。かっこいいと思います」

今年のインターハイは地元、宮城県で開催されるため、いっそう熱が入っています。真美さんは5月の予選会で個人戦への出場権を得、団体メンバーにも選ばれました。「インターハイでは優勝したい。個人戦でも団体戦でもがんばります」

復興したところと、まだのところ

震災が起きたのは、真美さんが小学4年生のときでした。母の琴美さんが車で学校に迎えに来てくれ、弟妹たちといったんは自宅へ。避難するために、布団や教科書、着替えなどを車に積み込んで走り出した瞬間、津波が近づいてくのが見えたそうです。あわてて車から降り、アパート2階の自宅に駆け上がりました。

「車が流されていくのが窓から見えて…。すぐ下の妹は4月から小学1年生だったのですが、新しいランドセルは車に積んだまま。ああ～、と思ったのを覚えています」

海の方ではガスタンクが爆発して炎上。夜は停電で真っ暗な中、窓だけが炎を反射して赤々と光っていたそうです。それでも6年が経ち、随分と復興が進んだといいます。

「家の近くにグラウンドがあって、流された車やガレキがいっぱい積み上げてありました。それがいまはなくなって、復興住宅になりました」

ただ、真美さんが通った中学校は校庭が広いので、仮設住宅が建てられました。そこに、いまも住まざるを得ない人たちがいるのも事実です。

「もう6年も経つので、その人たちが早く落ち着いたところに住めるといいなあと思います」

小さい子どもに関わる仕事をしたい

弓道の練習に一生懸命の真美さんですが、授業では保育の勉強に力を入れているとか。将来は、小さい子どもに関わる仕事に就きたいのだそうです。

「私は4人兄弟のいちばん上で、下の子たちの面倒を見るのが好きでした。いちばん下の妹はまだ3歳半なので、一緒にお風呂に入るし、着替えの手伝いなどもします」

震災時、小学校入学前だったすぐ下の妹は、もう中学生。真美さんの背中を追って、弓道部に入部しました。いまはその妹にも弓道を教えながら、保育の仕事にも夢を抱いてがんばっています。



「高校は自由な校風。文化祭も自分たちで企画を立てて、クラスで団結できたのが楽しかった」

いまが充実！ 放送委員会で 夢に向かう

安藤由美さん

福島県いわき市 高校2年生

※奨学生の名前は仮名です。学年は取材当時のものです。

福島県いわき市の高校2年生、安藤由美さんが、いま熱心に取り組んでいるのは放送委員会の活動です。いつか自分でドキュメント作品をつくってみたい。そう思って、活動に参加しました。「NHK杯 全国高校放送コンテスト(Nコン)」を目指して、放課後は月曜から金曜まで毎日、さらに土日にも作業をすることがあるといいます。

「自分が興味のあることだから、忙しくても充実しています。私はNコンで研究発表をするため、機材の扱いや発声の仕方など、テーマを見つけて研究しています」

ほかに、インタビューの手伝いをしたり、ドラマづくりのロケを手伝ったりと、委員会では幅広く活動しています。Nコンの地区大会は5月、県大会は6月、そして全国大会は7月に開催。由美さんの高校は、過去に何度も優勝歴のある強豪校なだけに、今年も力の入った発表が期待できそうです。

ようやく落ち着いた家族の暮らし

震災時、由美さんは福島県双葉郡大熊町の小学4年生でした。福島第一原発の事故により、地元で仕事のあった父を残し、家族で東京へ避難。そこから、母の実家がある福岡へと避難先を変えます。福岡の小学校で1年間過ごし、家族とともにいわき市へやってきたとき、由美さんは小学6年生になっていました。

「私は人見知りなのですが、福岡でもいわきに来たときも、周りの人たちに明るく受け入れてもらえてよかったです。いわきでは、父とまた一緒に暮らしが始まり、仲よしの友だちもできて、やっと落ち着いたという感じです」

とはいえ、震災以来、まだ一度も帰ったことのない大熊町を、忘れたわけではないといいます。

「この前、大熊町について調べていたら、小学校の内部のようすがインターネットで見られるようになっていました。ちょうど帰りのホームルームのときに地震が起きたので、避難するときに投げ出したカバンとか、壁に貼ってあった自分の絵とかが、360度見られるんです。ポロポロになっていたけれど、懐かしかった。やっぱりふるさとなんだなあと思います」

地震が起きたことで、いまの自分がある

昨年の夏休みには、復興支援の一環として、アメリカで3週間、留学体験をすることができました。

「アメリカでは、若いリーダーたちの体験談がすごく刺激になりました。また、高校生活では就学支援奨学金のお世話になっており、地震がなければ福岡の友だちとも出会うことはありませんでした。地震が起きたことで、いろいろな人たちに支えていただいた。そのおかげでいまの自分があるんだと思うと、不思議な気持ちになります」

地震も自分のひとつの糧にしたいと語る由美さん。将来はマスメディアの仕事に就きたいと夢を語ってくれました。そのためにも放送委員会の活動をがんばり、英語の部活も続けながら、学校生活を満喫しています。

「目指している仕事で直接、誰かの支援ができるわけではないけれど、大人になったら、ボランティア活動などで、なにかしら社会に恩返しをしたいです」

「いつかは映像でドキュメント作品をつくってみたいです」



勉強も部活も 逃げずに がんばりたい

友坂悠里くん

福島県いわき市 高校2年生

※奨学生の名前は仮名です。学年は取材当時のものです。



「勉強と部活の両立は大変ですが、朝早く起きるのにも慣れました」



真剣な表情でティンパニを叩く悠里くん。今年5月の定期演奏会で

友坂悠里くんのふるさは福島県双葉郡富岡町。震災後に福島第一原発が爆発したため、家族とともに、会津、山形県米沢市を経て、小学5年生のとき東京都の奥多摩町でしばらく暮らしました。悠里くんは、その奥多摩での1年間が本当に楽しかったといいます。

「全校生徒合わせても100人くらいの小さな学校で、被災地から数人の子と一緒に避難していました。最初は不安でしたが、先生もクラスの子も親切にしてくれて、学校が終わると校庭や神社で遊んだし、雪遊びも楽しかった」

ある日、学校にいるとき地震があり、悠里くんは震災を思い出して動揺しました。そんな自分には誰も気づかないだろう。そう思っていたら、帰り道に友だちが「大丈夫だった?」と気遣ってくれたのです。そのときの嬉しさは、いまも悠里くんの胸に深く残っているといいます。

避難所を引き払うとき、お別れ会が開かれ、避難してきたひとりひとりにメッセージが渡されました。それまでの人生で、いちばん泣いたという悠里くん。「そのメッセージはいまも部屋に飾ってあって、僕の宝物です」

始発で学校へ行き、終電で帰る日々

奥多摩から、父の仕事の関係で大分へ。そして悠里くんが中学1年生のとき、福島県いわき市へ来ました。高校2年生になったいまは、勉強をとてもがんばっていて、朝は5時半に起きて始発電車で高校へ行き、ホームルームが始まるまでの1時間、友だちと勉強をしています。また放課後は、部活が終わってから市の施設へ行き、22時3分発の終電に間に合うまで勉強しているそうです。

「中学校のときの社会科見学で国の仕事に興味がわきました。希望の大学へ入り、国家公務員になって、教育で社会を変える仕事がしたいと思っています」

得意な学科は英語と数学。苦手なのは国語の現代文ですが、担任でもある国語の先生から勉強の仕方を教えてもらい、いまは少し理解が進んだそうです。

大好きな吹奏楽部でティンパニを叩く

悠里くんが勉強と同じくらいがんばっているのが、吹奏楽部での活動です。

「僕の高校は、10数回も全国大会に連続出場している強豪校。だから練習は大変ですが、先輩方は皆、優しくて雰囲気がいい。とても楽しいです」

夏のコンクールは7月の支部大会から。2年生の今年は、悠里くんも大会で演奏します。楽器は、小学生のときに始めたティンパニ。

「ティンパニは曲のクライマックスで目立つことが多くて、それはプレッシャーですけど、やり遂げたときは達成感があります」

先輩がしてくれたように、自分も高校を卒業したら、母校で後輩たちの手伝いがしたいといいます。

「勉強も部活も3年間、逃げずにがんばりたい。震災後、奥多摩や大分、いわきでいろんな出会いがあって、その人たちとのつながりが僕をつくってきました。そういう恵みを、これからも生かしていきたいです」



鉄道が再開されず、高校まではBRT(代行バス)で30分かかる。
奨学金はその通学費や教科書代などに活用されている

新しい町を 見つめて 未来を描く

川本聡子さん

岩手県陸前高田市 高校1年生

※奨学生やご家族の名前は仮名です。学年は取材当時のものです。

「好きな作曲家はショパンとドビュッシー」という川本聡子さんは、陸前高田市の高校1年生。小学1年生のときに始めたピアノが趣味だそうです。しばらくやめていた時期がありました。

陸前高田市は広大な市街地が津波に襲われ、1本だけ残った「奇跡の1本松」で知られます。以前は海の近くに住んでいた聡子さんの家族は、「ここは津波の心配があるから」という祖父母の意見に従い、わざわざ山の方に家を建てたとか。震災が起きたのは、その5年後のことでした。安全だと思っていた新築の家は、ローンだけ残して津波で全壊。大事にしていたピアノも流されてしまったのです。「震災があったのは、ピアノを習い始めて3年くらいのころ。どこかに流れ着いていないかと、母と方々探したのですが、見つかりませんでした」

家の再建など生活も大変な中、両親が中古のピアノを買ってくれたのは、震災から4年後のことでした。

家族皆が元気でいられるように

聡子さんの家族は、両親と兄、妹、そして祖父母という構成。母の由紀恵さんは、震災後をこう振り返ります。「うちは共働きなのですぐには家に戻れず、おばあちゃんが子ども3人を連れて逃げてくれました。津波はこないからと、そのまま家にいたら皆ダメだったと思います」

その後は親戚の家で寝泊りをし、やがて近くの空き家を借りて住み始めました。高齢の祖父母が一緒なので、仮設住宅での暮らしは難しいと判断したからです。

「でも、借りていた家は古くてとても寒く、おじいちゃんとおばあちゃんが体調を崩すのでは、と心配になりました。それで、家のローンはまだ残っていたのですが、もういちど、さらに山側に家を建てることにしたのです」

震災から6年。被災した家のローンはようやく払い終えたものの、いままた新しい家のローンを抱えています。

陸前高田の町はいちどなくなってしまいましたが、まさにゼロから、新しい町が生まれつつあります。聡子さんの家族も、再びこの町に根を下ろそうとしています。

忙しくても充実した日々

聡子さんの通う高校は進学校。授業のスピードが早くて大変だといいますが、英語と社会が得意だそうです。

「中学時代の英語の先生は授業が面白く、海外の話などいろいろしてくれて、それで英語が好きになりました」

将来のことはまだわからないけれど、英語を生かして海外と関わる仕事にも憧れているとか。一方、部活では陸上部のマネージャーとしてがんばっています。

「大会になると試合が何日もあって大変ですが、いろんな競技が見られて楽しいです。応援も一生懸命しています」

放課後だけでなく土日にも部活があり、グラウンドの掃除をしたり、タイムを計ったり、記録をつけたりと忙しい毎日。そんな中、いちばん楽しい時間は、由紀恵さんがつくってくれたお弁当を友だちと食べる時だそうです。

家族で支え合い、震災後はいろいろな支援にも支えられました。そんな聡子さんにはやってみたいことがあります。「ボランティアで高齢者の施設や保育園などに行って、人のお手伝いをしたいと思っています」

「読書が好き。『世界から猫が消えたなら』や『氷菓』など、映画化やアニメ化された本も面白かったです」



ずっと野球が 好きだから、 夢は甲子園

中山美里さん・舞さん・翔くん

宮城県気仙沼市 高校1年生

※奨学生やご家族の名前は仮名です。学年は取材当時のものです。



気仙沼はかさ上げ工事が進み、あちこちに復興住宅が建ち始めている。
「先週、仮設から復興住宅に移って、私たちにも自分の部屋ができました」



「高校の野球部員は全部で90人くらい。7月から甲子園の予選が始まります」

中山美里さん・舞さん・翔くんは、気仙沼市に住む三つ子の姉弟。3人とも小学2年生のときに、学校の野球クラブで野球を始めました。しかし翌年、東日本大震災で学校が被災し、美里さんたちの家は津波で全壊、クラブの子どもたちも被災して、皆ちりぢりになってしまいました。

母の千恵子さんと父の健人さんは仕事が忙しく、生活のめどが立つまでと、市内のアパートで生活を始めます。一緒に住んでいた祖父母は仮設住宅へ。そして3人は、市街地から10kmほど離れた母方の祖母の家で暮らすことになり、学校も転校しました。両親に会えるのは、週末だけ。幼い3人にとって心細い日々が続きますが、そんなとき、方々の学校へ転校していった野球クラブの子どもたちが、また集まれるようにと「気仙沼ベースボールクラブ」が立ち上がったのです。震災2か月後のことでした。

それ以来、週末は両親に会える日であり、友だちとも再び野球ができる、2倍に嬉しい日となったのです。

やっぱり家族と一緒に暮らそう

両親や祖父母と離れ離れの生活は、3人が中学2年生になるまで続きました。家族一緒に暮らしが再び始まったのは、実に5年ぶりのことです。これには、ある悲しいきっかけがありました。千恵子さんは振り返ります。

「津波で流された家は、新築してまだ4～5年目。ローンだけが残ってしまい、夫婦で一生懸命働きました。そんなとき、おじいちゃんが仮設住宅での慣れない暮らしの中、亡くなったんです。それで、もう家族ばらばらの生活は限界だ、このままだと皆だめになってしまうと、仕事を減らして仮設住宅で一緒に暮らすことにしました」

同じ頃、健人さんも無理がたたって体調を崩し、仕事を辞めることに。いまはだいぶ回復し無理のない仕事を始めています。千恵子さんも前より負担の少ない公民館の嘱託職員となりましたが、幸いローンは払い終えたそうです。「働くのも大事ですが、いまは子どもたちの成長を見守りながら、少しゆっくりしようと思っています」

甲子園に行きたい！

3人が通う高校は、宮城県内でも有数の野球の強豪校。ただ3人同時なので、就学支援奨学金がなければ、この高校への進学は無理だったと千恵子さんはいいます。

「すごく悩みましたが、奨学金のお話があったので、思い切って進学させることにしました。本当に感謝しています」

野球部は男子のみ。だから入部したのは翔くんですが、美里さんと舞さんも、子どものころからの成果が認められ、特別にマネージャーとして抜擢されました。

「練習はきつくて大変です。でも3年間続けるし、その後もやっていきたい」(翔くん)

「スコアをつけるのがちょっと難しいけど、部活はすごく楽しいです」(美里さん・舞さん)

野球に集中する3人ですが、将来の夢は三者三様です。「小さいころから子どもと遊ぶのが好きだったから、幼稚園の先生になりたい」(美里さん)

「警察官になって町の人を助ける仕事がしたい」(舞さん)

「いままでたくさんの人に助けられてきたから、今度は僕が人を助ける仕事に就きたい」(翔くん)

そして、いちばん近くて大きい3人の夢は……。

「甲子園に行きたいです！」

目を輝かせて宣言しました。

子どもたちから、ご家庭

POSTAGE

★ POST SERVICES ★

奨学金で制服や教科書をそろえたい

東日本大震災から6年経ちましたが、まだ僕たちのことを忘れずに支援してくださって本当にありがとうございます。僕は先日、地元の公立高校を受験しました。いまはその結果をドキドキしながら待っているところです。もし合格したら、いただいた奨学金で制服や教科書など必要なものをそろえたいと思います。高校の勉強についていけるようにがんばりたいです。ありがとうございました。

将来への希望もいただいた

私の将来の夢は、中学校の先生になって、また地元に戻り、働くことです。ですから、この高校合格を夢への第一歩としていきます。そして、奨学金を大切に利用して、充実した高校生活になるように励んでいきます。募金をしてくれた方々からは、この奨学金を通して“将来への希望”もいただいていると感じています。本当にありがとうございます。

一生懸命勉強に励みたい

このたびは、奨学生に選んでいただきありがとうございます。多くの方々の募金によって支援していただけることを自覚し、春からの高校生活では、将来社会に貢献できる人間になれるよう一生懸命、勉強に励みたいと思います。いただいた奨学金は教科書や参考書など教材費用に役立てていきたいと思っています。

子どもたちから
「ありがとう！」



帰る場所はなくなったけれど

震災による避難生活も6年になりました。大好きだった自宅は、中間貯蔵施設建設予定地となったため、国のものになってしまいました。帰る場所がなくなってしまいましたが、たくさんの人びとに助けをいただきながら、学業や部活に専念させてもらっています。感謝の気持ちを忘れずに、目標の大学に進学できるようがんばります。

いつか誰かの役に立つ人間になりたい

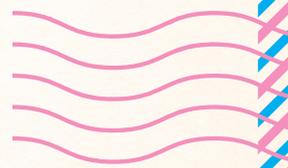
皆さまの募金によって成り立った奨学金のおかげで、無事に高校へ進学することができました。感謝の気持ちをいつまでも忘れずに、これからの高校生活を充実させていきたいです。高校を卒業したら、これからの社会を担っていける人間になりたいです。奨学金のおかげで高校に進学できたように、私もいつか誰かを助けられるようになりたいです。



たくさんの人たちへの感謝を胸に

いつも私たちの学生生活のためにご支援くださり、ありがとうございます。震災から6年が過ぎました。私は3月になると避難してきた日のことを思い出します。体育館で炊き出しをしてくれた人、心と体を気遣い全国からかけつけてくれた医師、ボランティアで髪の毛を切ってくれた美容師、体育館に届いた全国からの支援物資。あの日、あのとき、たくさんの人たちが私たちを助けてくれました。そして、いままなお応援と支援を続けてくれる皆さまに、感謝の気持ちでいっぱいです。私は人のため、社会のために貢献できるような大人になるため、学生生活に励みます。





から、「ありがとう！」

進学へと夢をつなげている息子

震災から6年経ちましたが、元の住まいへ戻ることはまだ叶っていません。でも、避難先で元気に生活をおくっております。3年もの間、支援を受けられたことは、精神的にも金銭的にも大きいものがありました。震災前の状態になるには、まだしばらくの時間が必要ですが、部活に勉強にと高校生活をおくる息子が、進学へと夢をつなげていることをうれしく思っています。今後とも支援くださった皆さまへの感謝を忘れずにがんばってまいります。長期間にわたるご支援ありがとうございました。

不安な生活でも、子どもは笑顔で学校に

東日本大震災の原発事故により、いまも避難先で生活しています。今後のことを考えると不安ばかりの状態です。生活の拠点をどうするかも決められないまま、家族もバラバラの生活です。そんな日々ではありますが、子どもは毎日笑顔で学校に通ってくれています。募金者の方々、本当にありがとうございました。奨学金は大切にに使わせていただきました。

保護者から お礼のメッセージ

学業支援こそが 子どもたちの未来を照らす

思い起こせば震災後、持ち家が津波で全壊、同居していた祖父宅も大規模半壊といった厳しい環境の中でご支援をいただき、学生生活を無事におくることができたことを深く感謝しております。これを糧に、子どもには将来、子どもたちが平等に教育を受けられる環境づくりを支援できる人間に成長してもらいたいと願っております。

この混迷化した時代にも、未来を担うのは子どもたちです。学業支援こそが、その道筋を照らす大きな光明になるのだと思います。私たちも今後、子どもたちの将来のために、微力ながら何かの形で支援のお手伝いをしていきたいと考えております。

普通の毎日は当たり前ではないと知った

早いもので、震災から丸6年が過ぎました。当時小5の終わりを迎えたばかりだった息子が春からは高校3年生。いよいよ自立への方向付けをする学年となります。思いもよらない原発事故で、避難生活を経験することになってしまい、多感な時期の息子たちは、大人にはいえない苦しみや葛藤を抱えてきたものと思います。明るく活発だった息子が、一時期は不登校になり、親としてどうしてやることもできず、親子ともども苦しい日々もありました。しかし、手を差し伸べてくださる方々の温かなご支援に支えていただき、今日の日を生きることができています。感謝の気持ちでいっぱいです。

毎日が普通に過ぎていくことのありがたさ、大切さが決して当たり前ではないと思えるようになったこと。そして、どんなに辛くても、必ず乗り越えられるということ、私たち家族はあの震災以来の避難生活を通して学びました。

息子には、自分の未来を大切に、同じように周囲の人びとの未来も大切にしながら、人生を歩んでいってほしいと思っています。大きなことはできなくても、支えられる側から支える側になり、世の中の一員として生きていってくれることを願っています。3年間温かいご支援、ありがとうございました。

口数の少ない長男の表情から

募金をしてくださいました全国の方々に、心から感謝申し上げます。奨学金は長男の学生専用バス定期券と学用品、高校に振り込む諸経費にあてさせていただきました。私も介護施設のパートに出ておりますが、支援がありますと大変心強く、昨年は、沖縄への修学旅行も経験させてやれました。長男は口数少ないのですが、修学旅行が楽しかったことは、帰宅後の表情から伝わってまいりました。来年度は、平(たいら)工業高校の3年生に進級です。就職に向けしっかり学んで、技術を身につけていくことと思います。本当にありがとうございました。

収入が激減した中、奨学金に助けられた

東日本大震災による原発事故で、約30年務めてきた会社を辞めざるを得なくなりました。アルバイトなどをしながら暮らしを支えてきて、平成28年4月にやっと正社員になることができましたが、年取は原発事故以前の約1/3まで激減しました。このような状況で奨学金をいただくことができ、大変助かりました。子どもも高校3年生になり、来年は大学に進学するつもりで勉強しています。私も大学卒業までは親の責任と思い、貯金を切り崩しながらがんばってまいります。募金者の方々にも「3年間、大変助かりました」と伝えていただきたいと思っております。

人びとの支えが自立への力に

まず、この3年間の、ユネスコ協会就学支援奨学金を給付いただき、心よりお礼申し上げます。今年、高校3年生になった子どもは、元気に健康に育っております。思えば震災以来、語り尽くせないたくさんの方の経験をしました。私たちは、被災者という立場から、そろそろ震災経験者としての役割に転換すべきときがきたと感じています。

年月とともに、震災は少しずつ過去のものになっていると実感しています。ときが止まったまま、時間だけが進んでいるのです。確実に未来はくるのに、あまいな喪失感はいまも毎日襲いかかります。だからこそ、再び全国のどこかで自然災害が起きたとき、この喪失感、絶望感を味わう人が限りなく少なくすむよう、経験を後世に伝えていきたいと強く願っております。

最後に立ち上がるのは自分自身です。ただ、奨学金で支援していただいた人びとの支えが、どれだけこの「自立」への力になったことか。今度は私たちが全国の皆さまの力になる番です。経験のバトンタッチです。

被災地のいま

教育現場の 声

岩手県 陸前高田市



被災した中心市街地一帯で大規模な復興工事が進行中



中心市街地では、高さ10メートルを超える土地のかさ上げ工事が行われている



陸前高田市の中心市街地に2017年4月にオープンした商業施設。新しい商業の拠点になることが期待される

教育現場の声

VOICE

東日本大震災より今日まで、子どもたちの教育環境の復旧に努めてきましたが、校庭への仮設住宅の設置や仮設住宅からの遠距離通学など、子どもたちを取り巻く環境は依然として厳しい状況にあります。そのような中、今年1月には、校舎が全壊した2校を含む3校が統合した高田東中学校で、念願の新校舎での授業が始まりました。また、かさ上げが進む中心市街地では、新しい市立図書館が7月に開館し、少しずつではありますが着実に教育環境の復興が進んでいることを実感しております。

このような状況の中、昨年度、日本ユネスコ協会連盟様よりユネスコ協会就学支援奨学金のお話をいただき、非常にありがたく感じました。厳しい教育環境にあっても、子どもたちが進学などに躊躇せず、自分の夢に向かって進んでほしいと願っており、本奨学金はそんな子どもたちの大きな力になると確信しております。

ご支援いただいた方々の想いを感じながら、一日も早く子どもたちが震災前の環境で教育を受けることができるよう、そして、さらに質の高い教育を提供できるよう、教育委員会としても日々邁進する所存であります。



陸前高田市教育委員会
教育長 山田 市雄

宮城県 気仙沼市



震災時、大型船が打ち上げられた鹿折(ししおり)地区。土地の整備工事などの復興作業が続く



仮設住宅(93団地・3504戸)の集約が進み、2017年6月末現在の入居世帯は551戸まで減少した。階上(はしかみ)中学校の校庭に建設された仮設住宅も、2017年度中に撤去され、今後、校庭が復旧される予定



生鮮カツオの水揚げが20年連続日本一を誇る日本有数の港町・気仙沼の魚市場。水揚げは震災前の7~8割まで回復した



教育現場の声

VOICE

東日本大震災から6年。津波浸水域のかさ上げ工事がおおよそ完了し、新しい街区の区割りや復興住宅の建設が進んでいます。震災当時孤立した大島に橋が架かり、気仙沼湾を横断する三陸道の橋脚も姿を見せてきました。

新しい町の形に復興の勢いを感じますが、依然として校庭に仮設住宅が残り、仮の住まいから通学する子どもたちが少なくありません。震災後の混乱や不安、焦燥の中で育った子どもたちは、いまも多様な課題を背負っているのです。

このような中、ユネスコ協会就学支援奨学金を通じて、高校進学に係る3年間の奨学金を得る機会をいただきました。震災後のさまざまな課題を抱えて苦悩する保護者と、震災後を生きる子どもたちの背中を押す力になるものであります。

気仙沼市は「海と生きる」を震災復興のテーマに掲げ、その鍵を人材育成が握っていると考えております。本奨学金を生かして成長した子どもたちの活躍を願い、今後も教育による人づくり、震災復興を進めてまいります。本奨学金の実現に向けてご尽力いただいたすべての皆さまに感謝申し上げます。本当にありがとうございます。



気仙沼市教育委員会
教育長 齋藤 益男

福島県 双葉郡富岡町



JR富岡駅。津波により駅舎が流され、現在は不通となっているが、2017年10月頃の運行再開を目指し新駅舎の建設が進められている



富岡第一中学校。子どもたちが安心して学べる環境を整備するため、現在復旧工事が進行中。2018年4月には小・中併設の学校として生まれ変わる



震災後も変わらず咲き続ける町のシンボル、夜の森の桜



教育現場の声

VOICE

はじめに、当町の中学生への奨学金給付について、心より感謝申し上げます。

本年4月、富岡町は一部を除き避難指示が解除されたとはいえ、大人はまだ日常を取り戻せていません。しかしそんな中でも、避難生活にある子どもたちは、その大変さを感じさせることなくひたむきに学んでおり、その姿を見聞きするたびに「子どもたちの就学を途切れさせたくない」との思いを強くしています。

また、「震災当時、小学1年生だった息子も中学2年生。富岡町を離れ6年、息子は避難先で地域とのつながりを強め、元気ががんばっています」「『富岡に帰りたい』といていたのは震災後2年くらいで、いまは避難先の学校に通い、友だちがで、そして部活動に打ち込んでいます」との保護者からの声は本当に嬉しく、また、安堵します。と同時に、いまの生活の場が子どもの「地元」になるのではとの思いも募ります。

しかし、家族のつながりを通して郷土を語る子どもたちになってくれれば、この難局を乗り越えたとき、彼らが見る風景の中に、「とみおか」の風景もきっとあるだろうと期待してやみません。



富岡町教育委員会
教育長 石井 賢一

子どもたちが 豊かな未来を描けるように



奨学金事業

[概要] 三菱UFJフィナンシャル・グループ(MUFG)と協働して標記基金を創設。

対象者

東日本大震災発生時に災害救助適用地域に居住しており、両親もしくはいずれかの保護者が死亡・行方不明となった子どもで、小学校から高等学校に在籍していた児童生徒。
(2012年～2014年の4月に小学校に入学した児童も対象)

支払金額と期限

奨学生一人当たり一時金10万円+月額2万円を高校卒業まで給付。

[2016年度の支援]

2016年度は継続給付を行い、123名の奨学生が高校を無事卒業し、奨学金の給付を終えました。
(新規奨学生の募集は2014年度の小学1年生の募集をもって終了しました)

受給者数

799名

2016年度 奨学金給付額

1億9210万円

[2011～2016年度までの累計受給者数] 1484名

心豊かな成長プログラム

第5回TOMODACHI・MUFG国際交流プログラムを実施。奨学生2名を含む被災地の中高生20名を米国に招待し、南カリフォルニアなどで現地の高校生と交流してもらいました。参加者たちは、双方の文化、リーダーシップの考え方、企業およびコミュニティのあり方を学びながら、現地の生活にも触れ、異文化理解を深める機会となりました。



ロサンゼルス日本総領事館でスピーチする奨学生



成田空港での結団式

奨学生から「ありがとう!」

将来、航空機設計者になることを志し、4月からは一関高専へ通います。去年の夏には、ロサンゼルスでのホームステイがあり、そこで英語の大切さを感じました。将来のため、高専に入学してもがんばりたいと思います。目標のため、それ以外にもたくさんのお話を学んでいきたいです。これからもよろしくお願いします。
TOMODACHI・MUFJ 国際交流プログラム参加者 岩手県・高校1年生

無事高校に進学することができました。入学式も終わり、新しい友だちができ、楽しく過ごしています。部活ではヨット部に入り、高校が海洋系なので、よい部活に入ったと思っています。高校で取れる資格がたくさんあるので、たくさん取るつもりです。いまの環境があるのは、MUFJさんと日本ユネスコ協会連盟さんのおかげです。勉強と部活をがんばっていきます。ありがとうございます。

宮城県・高校1年生

最近やっと高校受験が終わり、仲のよかった中学校の友だちと別れることを少し悲しく思っています。自分は将来、遺児支援の活動ができる場所で働きたいと考えています。その職に就くためにも大学に行かなければいけません。そのため、友だちは少ないけれど進学率の高い高校で勉強に取り組んでいきたいと思っています。中学校では英語がとくに苦手だったので、得意教科にできるような意欲的にやっていきたいです。趣味は読書で、長時間ぶっ通して読むこともよくあります。勉強でも集中力を高めていきたいです。 岩手県・高校1年生

卒業生から「ありがとう!」



ご支援をいただいたたくさんの方さまへ
私は、震災により生活が大きく変わりました。父を亡くし、家が全壊になり、不安な毎日を過ごしました。先生の勤めがあり、奨学金をいただくことになりました。大学に進学するため予備校に行ったので、学費に使用させていただきました。大学を卒業したら、人の役に立つ仕事に就き恩返しをしたいと思っています。長い間奨学金をいただき感謝いたします。 宮城県・卒業生

卒業生とその保護者から「ありがとう!」

僕は、この3月に石巻支援学校 高校部を卒業しました。学校での思い出はたくさんあります。とくに合宿や修学旅行が楽しかったです。修学旅行は京都、大阪に行きました。USJや海遊館にも行きました。お好み焼きも美味しかったです。ほかにもバザーや他の高校との交流がありました。どれもみんなよい思い出です。



そして、4月からは社会人です。実習をがんばったおかげでヨークベニマルに就職することになりました。僕の目標は一般就労でした。その夢がかなってうれしいです。これからは、お客さまに気持ちよく買い物をしていただけるように、笑顔でがんばります。これからの目標は、自立することです。少しでも自分のできることを増やせるように努力します。いままでたくさんのご支援をありがとうございました。 宮城県・卒業生

保護者より

桜の便りも聞かれ始めるようになりました。甥も4月からは社会人です。おかげさまで就職までこぎつけました。振り返りますと、震災から無我夢中で過ごしてまいりましたが、卒業を迎えてひと安心しました。無事にここまで成長することができたのも皆さまの励みや温かいご支援があってこそと、感謝しております。これからも職場や地域、行政の方々の助けが必要になりますが、自分の将来に向けて羽ばたこうとしている甥を見守っていききたいと思います。

長くて辛いと思っていた受験勉強が終わり、金沢大学への進学を決めることができました。金沢大学はずっと目標にしていた志望校なので、うれしい気持ちでいっぱいです。高校生活は勉強と部活をがんばった楽しい3年間でした。とくに部活では悩みも多く、辛いこともありましたが、部活のメンバーはこれからもずっと付き合いたい友だちになりました。震災から6年、仙台に引越して5年が経ちました。高校3年間もこれからの大学生生活も、その先も、やりたいことを楽しくできるのは、たくさんの方からのご支援と応援があるからです。

私の数少ない取り柄のひとつは、底なしの明るさだと思っています。それを武器に、皆さまからの応援に応えられるようがんばっていききたいと思います。これまで支援していただき、本当にありがとうございました。

宮城県・卒業生



保護者より

4月から目標としてきた金沢大学へ入学が決まり、また新しい土地で、新しい生活が始まります。娘は震災後、常に前向きで、石巻から仙台に引越してきたときから、明るく私を励ましてくれました。これからはひとり暮らしが始まります。体に気をつけて、これまで通り明るく皆と協力して生活してくれることを願っております。これまでのご支援に感謝申し上げます。

／ 学ぼう ／

減災教育

プログラム



東日本大震災の記憶と経験を、全国の学校防災につなげました。

アクサ ユネスコ協会 減災教育プログラムは、今後日本各地で起こりうるさまざまな自然災害に備えて、防災・減災教育を強化・改善したいと考える小学校・中学校・高校をサポートしています。災害時に地域の重要な防災拠点となる学校の防災力の向上を目指し、避難訓練を中心とした従来型の防災活動にとどまらず、災害に対して総合的な視点を持ち、より実効性の高い防災・減災教育の実践を推進しています。

サポート① | 助成金

防災教育に取り組みたい、防災教育を見直したい…。でも学校予算がない。そんな学校現場の声に応え、防災・減災教育に取り組みたいと考える小・中・高校を全国公募します。審査の上、採用された学校に助成金10万円を支援します。

サポート② | 教員研修会

助成校の先生が、東日本大震災の被災地で、大震災の経験や教訓を基にした防災・減災教育の実践を学びます。

サポート③ | 活動報告会

助成校の先生が助成金を活用して実践した活動を発表し、ワークショップを通して地域・校種を超えて日本各地の多彩な取り組みを学び合います。

2016年度の活動



先生が学んだことが、学校で子どもたちに伝えられ、さらに家庭や地域にまで広がりました。

助成校21校を決定し、東日本大震災の被災地である宮城県気仙沼市で開催した教員研修会に、助成校の先生28名を招聘しました。

教員研修会で学んだ先生28名が、学んだ成果を自校に持ち帰り、本プログラムの助成金を活用して、地域の特色に合わせた防災・減災教育に取り組みました。研修に参加した先生が他の先生を巻き込んだ結果、21校で480名の先生が防災教育に携わりました。

これらの先生方の指導のもと、6230名の児童・生徒が防災教育に取り組みました。

保護者や地域の方々2614名も活動に参加し、助成校21校の活動に計9324名の子どもたちや大人が参加。地域と連携した防災教育が大きく広がりました。



助成校リスト

都道府県	学校名
岩手県	宮古市立川井小学校／盛岡市立玉山中学校
宮城県	気仙沼市立面瀬小学校／仙台市立郡山中学校／宮城県多賀城高等学校
新潟県	新潟県立新潟県央工業高等学校
群馬県	群馬県立渋川工業高等学校
茨城県	日立市立豊浦小学校／常総市立石下中学校
長野県	長野市立湯谷小学校／白馬村立白馬中学校
静岡県	浜松市立西部中学校
和歌山県	和歌山市立高松小学校

都道府県	学校名
大阪府	大阪市立晴明丘小学校
兵庫県	兵庫県立尼崎小田高等学校／兵庫県立赤穂高等学校定時制課程
愛媛県	愛南町立城辺小学校
福岡県	福岡県立武蔵台高等学校
長崎県	長崎県立鹿町工業高等学校
佐賀県	玄海みらい学園
熊本県	宇城市立小川中学校

減災教育の新たな視点と実践的かつ体系的な研修を全国の先生方に提供しました。

2016年9月19日(月祝)、20日(火)、21日(水) (宮城県気仙沼市、岩手県一関市)

助成校の先生方28名を宮城県気仙沼市に招聘して教員研修会を実施しました。研修は、東日本大震災の教訓を活かした気仙沼市の防災教育から学ぶ特別プログラム。先生方は、専門家の及川幸彦氏(※下記参照)から防災・減災教育の基礎理論を学び、以下の多彩な研修プログラムに参加しました。また、気仙沼市の齋藤益男教育長からは特別講話として、震災当時の自身の現場経験に基づいた貴重なお話をうかがいました。そして、災害科学科のある宮城県多賀城高校からは先進的な実践を学び、さらに学校だけでなく地域との連携についても視野を広げるなど、被災地の実例をもとにした体系的かつ実践的な研修を行いました。

被災地をフィールドにした体系的かつ実践的で多彩な研修プログラム



- ESD(持続可能な開発のための教育)の理念と東日本大震災の教訓を活かした理論
- カリキュラムづくりの手法と活用事例(防災学習シートの活用方法)

- 気仙沼市立階上小学校で授業視察(「防災タイム」「防災マップをつくろう」)

- 気仙沼市立階上中学校で生徒主体の活動を学び、意見交換

- 被災者の案内による東日本大震災の被災地の視察・巡検(被災校舎の内部見学など)

- 多様な主体の参画と協働によるネットワークの構築と実践
- 研修を活かした自校のカリキュラム改善のためのワークショップ

参加した先生の声

減災教育は、子どもたちの命を守る重要な教育であるとともに、人間の生き抜く力につながる“人間教育”そのものだと感じました。そのようなビジョンをもって子どもたちへの教育に活かしたいです。



活動報告会で先生方が他校の実践や授業の工夫を学びました。

2017年2月24日(金) (東京都港区 アクサ生命本社)

年度末には、各助成校が多彩な防災教育の実践を発表する活動報告会を実施し、参加型ワークショップを通して、これからの防災教育のあり方について話し合いました。さらに、文部科学省の防災教育係長の千葉貴浩氏より、国としての防災教育の方向性などについての講話も行われました。本プログラムを通して、減災教育の重要性に対する思いを強くした先生方が、日本各地でそれぞれの学校の減災教育を変える力となっています。

プログラムの詳細や参加校の実践報告は、ホームページに掲載しています。ぜひご覧ください。

<http://unesco.or.jp/gensai/>

協力：アクサ生命保険株式会社 後援：文部科学省

プログラム・コーディネーター：及川 幸彦氏(東京大学海洋ライアンス 海洋教育促進センター主幹研究員)※

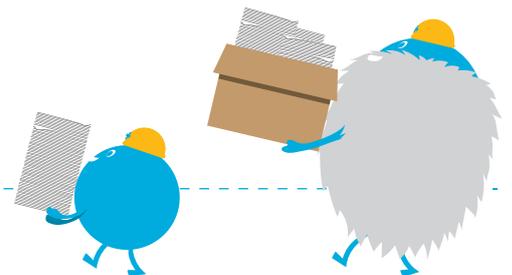
研修協力：気仙沼市教育委員会、気仙沼市立階上小学校、気仙沼市立階上中学校、特定非営利活動法人SEEDS Asia

講師・コーディネーター：及川 幸彦氏 講師：特定非営利活動法人SEEDS Asia 副事務局長 上田 和孝氏

現地講師：気仙沼市教育委員会教育長 齋藤 益男氏／気仙沼市立面瀬小学校教諭 熊谷 久恵先生／宮城県多賀城高等学校校長 小泉 博先生

被災地区ガイド：階上地区観光協会会長 辻 隆一氏

※所属・役職は2016年度当時のものです。



子どもたちの学びを支える支援の輪

日本ユネスコ協会連盟が行う教育復興支援活動は、以下の企業・団体をはじめとする多くの皆さまから温かいご協力をいただきました。この場をお借りして、改めて御礼申し上げます。

あいおいニッセイ同和損保
MS&AD INSURANCE GROUP

あいおいニッセイ同和
損害保険株式会社

あそびましょ。
AKAGI

赤城乳業株式会社

AXA アクサ生命
redefining / standards

アクサ生命保険株式会社

獺祭
DASSAI

旭酒造株式会社

NTT docomo

NTTドコモグループ

御苗場
VIBIANO

御苗場・テラウチマサト

ORIX foundation

オリックス米国財団

一般社団法人
銀座通連合会

一般社団法人銀座通連合会

GUCCI

グッチ ジャパン

株式会社 健康第一調剤薬局

株式会社健康第一調剤薬局

光明
KOUMEI

株式会社光明工事

SUNSYU
PAINT

三州ペイント株式会社

株式会社JUN

株式会社JUN

JXTG エネルギー

JXTGエネルギー株式会社

株式会社
生薬高度利用研究所

株式会社
生薬高度利用研究所

GIORGIO ARMANI

ジョルジオ アルマーニ ジャパン
株式会社

Shinmyo

宗教法人真如苑

信用金庫

一般社団法人全国信用金庫協会

雑司ヶ谷
鬼子母神堂

雑司ヶ谷鬼子母神堂

ソニー生命

ソニー生命保険株式会社

Sony Music

株式会社
ソニー・ミュージックアーティスツ

T-POINT

株式会社Tポイント・ジャパン

東芝テック
ソリューションサービス
グループ社会貢献基金

東芝テック ソリューションサービス
グループ社会貢献基金

TORAY

東レ株式会社



※50音順・敬称略

ご協力いただいた皆さま

個人募金者の皆さま

全国の個人募金者の方々からも多大なご支援をいただきました。

企業・団体の皆さま

上記でご紹介しきれなかった企業・団体の皆さまからもたくさんのご協力をいただきました。

子どもたちから子どもたちへ

幼稚園から大学まで、子どもたちや学生の皆さまからも、心のこもったご寄附が寄せられました。

ユネスコ協会・ ユネスコクラブ・会員の輪

日本各地のユネスコ協会・ユネスコクラブも継続した支援活動を行っています。
また、維持会員・賛助団体会員・個人会員の皆さまからも温かいご協力をいただき、ユネスコ精神が
集結しました。

会計報告

東日本大震災子ども支援募金事業 (2016年4月1日～2017年3月31日)

①ユネスコ協会就学支援奨学金

(単位：円)

項目	金額
前期繰越	478,468,344
寄附額	145,072,625
支出額	197,825,836
奨学金	178,500,000
事業経費	19,325,836
次期繰越	425,715,133

※ユネスコ協会就学支援奨学金は、原則として、奨学生1人につき3年間にわたって支援します。

※次期繰越金は、2015年度採用奨学生の3年目給付、2016年度採用奨学生の2～3年目給付、そして、2017年度以降の本奨学金事業に使用されます。

②MUFG・ユネスコ協会 東日本大震災復興育英基金

(単位：円)

項目	金額
前期繰越	1,249,559,305
寄附額	0
支出額	205,140,000
奨学金	192,040,000
事業経費	13,100,000
次期繰越	1,044,419,305

※MUFG・ユネスコ協会 東日本大震災復興育英基金は2014年度まで新1年生を募集し、奨学生が高校を卒業する2025年度まで継続されます。

※次期繰越金は、2025年度までの奨学金事業に使用されます。

③減災教育、相撲場等

(単位：円)

項目	金額
前期繰越	9,850,137
寄附額	16,459,460
支出額	25,308,678
支援物資ほか	14,100,000
事業経費	11,208,678
次期繰越	1,000,919

※相撲場支援等、年度をまたいで支援が完了するものがあります。次期繰越金は、それらに使用されます。

※当会計報告は、日本ユネスコ協会連盟が公認会計士および監事による監査を受けた計算書類をもとに、個別の活動のようすをわかりやすくお伝えるためにまとめたものです。

子どもたちの明日を支える奨学金
**東日本大震災
子ども支援募金**
ユネスコ協会就学支援奨学金

子どもたちが未来に夢を描けるよう、私たちは支援を続けてまいります。皆さまからの募金で子どもたちへの奨学金が継続できます。引き続き皆さまのご協力をお願いいたします。



日本ユネスコ協会連盟へのご寄附は、寄附金控除の対象になります。

銀行振り込みでの募金

以下の「ユネスコ協会就学支援奨学金」の専用募金口座までお願いいたします。

三菱東京UFJ銀行 神田支店 (普) 0297275

名義：シャ)ニホンユネスコキョウカイレンメイ

※領収書が必要な方は、大変お手数ですが、日本ユネスコ協会連盟までご連絡ください。

インターネットからの募金

ホームページからクレジット決済による募金をお申込みいただけます。

ユネスコ

検索



unesco.or.jp

毎月の継続的な定額募金 『月1・いいことプログラム』

クレジットカードの場合

ホームページから直接お申込みいただけます。

月1いいこと

検索



unesco.or.jp

口座振替の場合

口座振替申込書をお送りします。

お手数ですが、ご希望の方は当協会連盟までご連絡いただけますようお願いいたします。

お問い合わせ・連絡先

〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-3-1 朝日生命恵比寿ビル12階

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

TEL：03-5424-1124 (9:30~17:30 / 土・日・祝日を除く) ・FAX：03-5424-1126 ・メール：nfuaj@unesco.or.jp

日本ユネスコ協会連盟

仙台からはじまり、世界に広がった民間ユネスコ運動70周年

第2次世界大戦後間もない1947年、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と謳^{うた}うUNESCO (国際連合教育科学文化機関) 憲章の理念に共鳴した人びとにより、世界初の「民間ユネスコ協力会」が仙台に誕生しました。

その後の1951年、日本がUNESCOへの加盟を果たした後も、民間のユネスコ組織は全国に根を広げていきました。2017年8月現在、日本には283のユネスコ協会・クラブがあり、国内外でさまざまな活動を直接実施しています。

さまざまな活動

東日本大震災子ども支援のほかにも、下記のような活動を行っています。

2016年度は熊本地震支援も実施し、被災した熊本県内の12市町村の小中学校や学童クラブに、学習に必要な教材・備品などを支援しました。

世界寺子屋運動

“きょういくで、あしたへいく”

カンボジア、アフガニスタン、ネパール、ミャンマーで、学校に通えない子どもや、読み書きができない大人たちに学びの機会を提供。貧困のサイクルを断ち切り、明日を生きる力を育てます。



世界遺産活動

“人類共通のたからものを守り伝える”

世界の貴重な文化や自然を人類共通のたからものとして、次世代に伝える活動を行っています。カンボジアのアンコール遺跡群では修復事業や人材育成を行っています。



未来遺産運動

“日本のこころを、あしたへ伝える”

100年後の子どもたちに、日本の大切な自然や文化を伝えたい。そんな思いから、日本各地の市民活動を「プロジェクト未来遺産」として登録し、応援します。



青少年育成活動

“つなげよう平和の心”

ユネスコ協会ESDパスポート、子どもキャンプ、海外スタディツアー、出前授業、活動助成など、地域や学校と連携して次世代の育成を行っています。



公益社団法人
日本ユネスコ協会連盟

〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-3-1 朝日生命恵比寿ビル12階
TEL:03-5424-1121 FAX:03-5424-1126
<http://unesco.or.jp> E-mail:nfuaj@unesco.or.jp